

史跡伝 茨田堤

発掘調査報告書

—歴史遺産整備事業に伴う発掘調査—

2014年1月

門真市教育委員会

序 文

本報告書は、「古事記」・「日本書紀」に記載がある、記録に残るわが国最古の堤防「茨田堤」の伝承地として、大阪府指定史跡である「伝茨田堤」の発掘調査の成果をまとめたものです。

このたびの発掘調査は、平成24年度から開始された歴史遺産整備事業の一環として行い、「伝茨田堤」の今後の保存・整備・活用にむけての基礎資料を得ることを目的に実施したものです。

現在、「伝茨田堤」は指定地とその東西の宮野町・常称寺町に堤防状の高まりを見ることができますが、これまで埋蔵文化財の発掘調査等調査が実施されたことがほとんどなく、遺構の年代をはじめ遺構の性格が不明となっていました。

発掘調査では、13世紀に築かれたと考えられる堤防状の遺構が確認されました。「古事記」・「日本書紀」の記載を裏付ける古代の堤防跡の発見には至りませんでした。しかし、鎌倉時代の堤防状遺構が現在も保存されているという、多大な成果を得ることができました。

市内にあります貴重な文化財を保存し、市民の皆様をはじめ多くの方々に理解と親しみを持っていただけるよう整備・活用を進める、本書がその一助を担えれば幸いに存じます。

最後に、このたびの発掘調査に際し、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ関係各位に多大な指導と協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

平成26年1月

門真市教育委員会

教育長 三宅 奎介

例 言

1. 本書は伝茨田堤、門真市宮野町 175-23・183-3 における伝茨田堤発掘調査（略号:MND - 1）の報告書である。
2. 調査面積は 31.85 m²である。
3. 現地調査は平成 24 年 11 月 27 日から同年 12 月 21 日にかけて実施した。発掘調査業務については門真市教育委員会地域教育文化課 宇治原靖泰が担当した。調査中 12 月 3 日より株式会社地域文化財研究所 影山美智与が調査補助として参加した。
4. 遺物整理・報告書作成作業は平成 25 年 4 月 12 日から平成 25 年 12 月 10 日まで実施した。本書は担当者の指導・監督のもと影山美智与が執筆した。データ作成、遺物写真撮影および編集、印刷、製本については教育委員会の監督指示のもと、株式会社地域文化財研究所に委託した。
5. 発掘調査本業務は(株)東海アナースに委託した。
6. 発掘調査業務にあたり伝茨田堤調査研究指導委員会堀江門也委員長、藤本史子委員並びに大阪府教育委員会事務局文化財保護課から指導・助言を得た。また現地調査中には下記の方々から指導・教示を得た。
(敬称略、五十音順)
井西貴子、岡田賢、小山田宏一、工楽善通、寒川旭、玉井功、地村邦夫、藤本史子、堀江門也、山上弘
7. 本調査に関わる出土遺物及び写真・実測図等の記録資料は、門真市教育委員会において保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図・本文中における水準値は T.P. 値（東京湾平均海面値）を用いている。
2. 遺物実測図の番号と図版の番号は一致する。

本文目次

序文	
例言	
第1章 遺跡の歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯	4
第3章 調査成果	5
1. 第1トレンチにおける調査	5
層序	6
出土遺物	8
2. 第2トレンチにおける調査	8
層序	8
出土遺物	13
3. 第3トレンチにおける調査	14
層序	14
出土遺物	17
第4章 まとめ	18
報告書抄録	

挿図目次

図1 門真市位置図	1
図2 門真市の文化財分布図	3
図3 調査地位置図	4
図4 調査区位置図	4
図5 第1トレンチ平面図	5
図6 第1トレンチ西壁土層断面図	6
図7 第1トレンチ出土遺物実測図	8
図8 第2トレンチ平面図	9
図9 第2トレンチ西壁土層断面図	12
図10 第2トレンチ出土遺物実測図	13
図11 第3トレンチ平面図	15
図12 第3トレンチ西壁土層断面図	16
図13 第3トレンチ東壁土層断面図	16
図14 第3トレンチ出土遺物実測図	18

表目次

表1	第1トレンチ出土遺物観察表	19
表2	第2トレンチ出土遺物観察表1	20
表3	第2トレンチ出土遺物観察表2	21
表4	第3トレンチ出土遺物観察表	22

図版目次

図版1 遺構

(上) 昭和36年撮影調査地周辺航空写真

(下) 調査地近景(東より)

図版2 遺構

(上) 第2トレンチ掘削作業風景(南より)

(下) 第1トレンチ西壁断面(北より)

図版3 遺構

(上) 第1トレンチ西壁断面(南より)

(下) 第2トレンチ東壁断面(南より)

図版4 遺構

(上) 第2トレンチ西壁断面噴砂痕跡
(東より)

(下) 第2トレンチ西壁断面(南より)

図版5 遺構

(上) 第2トレンチ東側拡張部第7層上面検出
状況(西より)

(下) 第2トレンチ東側拡張部遺構完掘状況
(西より)

図版6 遺構

(上) 第3トレンチ東壁断面(拡張前 西より)

(下) 第3トレンチ東側拡張部第10層上面鋤溝
検出状況(西より)

図版7 遺構

(上) 第3トレンチ東側拡張部大畦畔検出状況
(西より)

(下) 第3トレンチ東側拡張部東壁断面(西より)

図版8 遺構

(上) 第3トレンチ西壁断面須恵器出土状況
(東より)

(下) 第2トレンチ調査終了状況(西より)

図版9 遺物

(上) 第1トレンチ出土遺物

(下) 第2トレンチ出土遺物

図版10 遺物

(上) 第2トレンチ出土遺物

(下) 第3トレンチ出土遺物

第1章 遺跡の歴史的環境

1. 地理的環境

伝茨田堤は大阪府門真市宮野町 175-23、183-3 に所在する大阪府史跡指定地である。門真市北端、京阪電車大和田駅の北東に位置し、式内社として知られる堤根神社と隣接しており、市内遺跡地図においては古墳・中世を中心とした宮野遺跡と重複している。北西約 2.5km の位置に東西方向を流れる淀川があり、北約 0.03km の位置で北東方向から流れてきた古川の流路が西に曲がる位置にあたる。

2. 歴史的環境

旧石器時代

市域において旧石器時代の資料は現在のところ確認されていない。全域が厚い沖積層に覆われているためである。大東市深野南のボーリングデータは、ウルム期最盛期の河内平野深野地域には湿地が広がっていたこと、気候は現在より寒冷だったことを示しており（梶山・市原 1972）、近接する門真市域もほぼ同様の環境であったと考えることができる。

縄文時代

縄文時代前期（約 7000 年～6000 年前）になると状況は一変する。旧石器時代にはヨーロッパ・北アメリカなどに数千メートルの厚さで覆っていた氷床が融けきったことと、「縄文海進」により急激に海面が上昇し、旧石器時代に陸地であった門真市域も水没し、「河内湾」が出現する。河内湾は門真市域はもとより、北は高槻市、南は八尾市、東は生駒山麓に達していたようである。

約 5000 年～4000 年前になると沿岸砂州が発達し、門真市域でも「水走沿岸洲」により、一部で離水（陸化）が始まっていたと思われる（梶原・市原 1985）。

門真市大字門真と守口市八雲東町に所在の西三荘・八雲東遺跡では縄文時代後期（北白川上層式Ⅲ期・約 3500 年前）の深鉢と浅鉢が出土している。しかし当時は定住生活がすでに始まっていたというより、乾期に離水する僅かな陸地を訪れ、魚・貝・水鳥などを獲る期節的な生活をしていたのではないかと考えられている（宇治原・植田 1993）。

弥生時代

次に市域に生活の痕跡が認められるのは、弥生時代前期（2300 年前）になる。このころの市域の状況は河内湾の陸化がさらに進んで、汽水の「河内潟」となっていた（梶山・市原 1985）。水走沿岸洲は離水が進み、細長く伸びた砂州上に門真市域の集落が形成されたと考えられる。市域における弥生時代の遺跡は、西三荘・普賢寺・古川・大和田・三ッ島遺跡が主なものである。

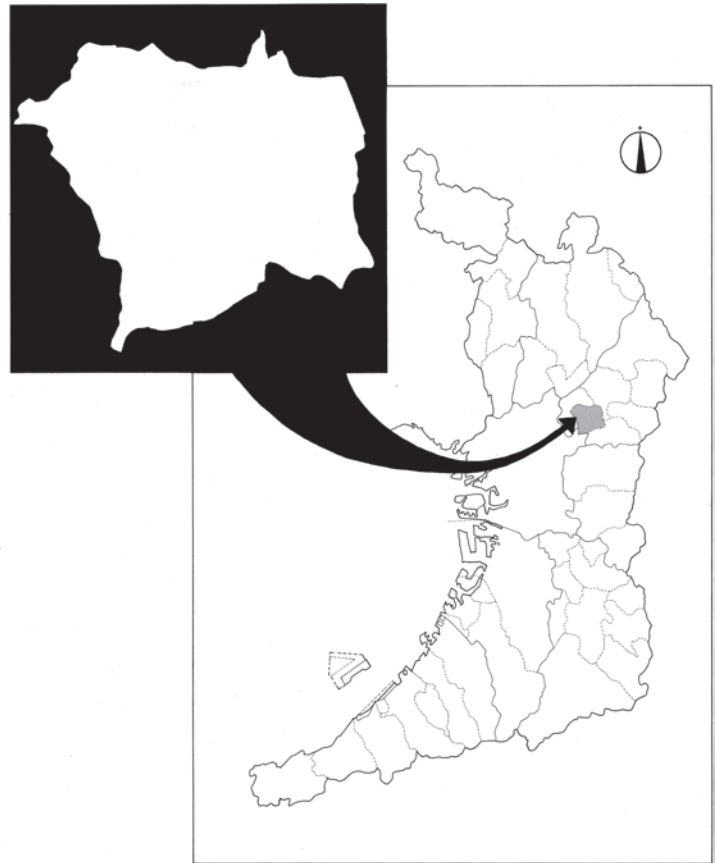


図1 門真市位置図

西三荘遺跡は、中期初頭から後期の土器が出土し、遺構は室町時代の墓地とみられる遺構以外ほとんど確認されていないが、土器・木製品など遺物の量は多い。

普賢寺遺跡は、前期後半から中期の遺跡で、昭和 60 年の調査で弥生前期後半の壺が遺構に伴って出土している（宇治原 1990）。また昭和 59 年の調査では、弥生時代の土器とともに石庖丁が出土している（福田 1984）。

古川遺跡は前期後半から後期の遺跡で、市内で唯一弥生時代全期間を通して継続する。また平成 10 年の調査で、前期後半から中期初頭に築造されたと考えられる方形周溝墓 10 基が市内で初めて確認され、弥生時代の前期から集落が成立していたことが確認された（宇治原ほか 1999）。

大和田遺跡は昭和 38 年に銅鐸 3 個が京阪電車大和田駅改修中に、地下 2 m の砂層中より発見されたことで知られている。銅鐸はいずれも弥生時代中期に鑄造された小型で扁平な作りのもので、四区袈裟襷文と無文のものがある（大阪府立弥生博物館 2011）。

三ッ島遺跡では、昭和 37 年に弥生時代後期の土器とともに、くり舟が製作途中の状態が発掘されている（上田ほか 1963）。

古墳時代

古墳時代の河内は、巨大前方後円墳を始め古墳が多く造られた地域であったが、門真市域においては最近まで古墳は確認されていなかった。しかし平成 12 年の普賢寺遺跡の調査で、6 世紀前半に築造された普賢寺古墳が発見された。この古墳は直径約 30 m の葺石を伴わない円墳と考えられ、盾持人埴輪をはじめ多数の埴輪が出土した（宇治原ほか 2000）。元町遺跡では 5 世紀後半から 6 世紀初めの資料が出土しており、1 km あまりしか離れていない普賢寺古墳との関係性が注目される。

また、市域には今回報告する記紀に記録が残る我が国最古の堤防「茨田堤」と伝えられている堤防状の遺構が唯一、宮野町・常称寺町に残り、一部が大阪府指定の史跡「伝茨田堤」として保存されている。

古代

市域の奈良・平安時代の遺跡は、西三荘・元町・橋波口・元町・古川・宮野遺跡で、遺物の出土がみられるが出土量は少ない。

主な遺構は橋波口遺跡の須恵器の甕を棺に転用した奈良時代の墓と、曲物を井筒に転用した奈良から平安時代の井戸であるが、ここからは平安時代の祭祀用とみられる大量の土器・桃核などが出土している（宇治原 1991）。普賢寺遺跡では伊勢の斎宮跡出土のものとそっくりな顔を描いた墨書土器が出土し（宇治原 1991）、元町遺跡の調査では、平安時代後期の軒丸瓦が出土した。また堂山町黄梅寺に飛鳥時代の金銅釈迦仏立像が伝世されていることが明らかにされたことから（松田ほか 2003、松田 2001）、斎宮茨田真手御宿所が黄梅寺付近にあったという伝承が単なる伝承ではなく、現実味を帯びてきたことも注目される。

【引用・参考文献】

- 上田宏範ほか 1963「門真市三ツ島遺跡発掘調査概報」『大阪市立博物館報』2 大阪市立博物館
 宇治原靖泰 1990「普賢寺遺跡発掘調査概要」Ⅰ 門真市教育委員会
 宇治原靖泰 1991「普賢寺遺跡発掘調査概要」Ⅱ 門真市教育委員会
 宇治原靖泰 1992「門真市橋波口遺跡発掘調査概要」門真市教育委員会
 宇治原靖泰・植田正幸 1993「西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要」門真市教育委員会・守口市教育委員会
 宇治原靖泰・角南聡一郎 1999「古川遺跡」門真市教育委員会
 宇治原靖泰・松田朝由・船築紀子 2000「普賢寺古墳」門真市教育委員会
 梶山彦太郎・市原実 1972「大阪平野の発達史」『地質学論集』7
 梶山彦太郎・市原実 1985「続大阪平野の発達史」古生物学研究会
 福田英人 1984『普賢寺遺跡発掘調査現地説明会パンフレット』大阪府教育委員会
 松田誠一郎・松田妙子・松原潔・岩間香・荒木泰恵 2003『門真市史』別巻 寺社美術編 門真市
 大阪府立弥生文化博物館 2011『豊穡をもたらす響き 銅鐸』大阪府立弥生文化博物館図録 45
 松田妙子 2001『佛教藝術』257号 毎日新聞社



図2 門真市の文化財分布図

第2章 調査に至る経緯

伝茨田堤は大阪府門真市宮野町 175-23、183-3 に所在する、現状で高さ 1 m あまりの堤防状の高まりが残存する遺構である。『古事記』・『日本書紀』に記述が残る我が国最古の堤防「茨田堤」の伝承地として、昭和 49・58 年に 542.97 m² が大阪府の史跡指定を受けている。しかし当該地においてはこれまでに埋蔵文化財の発掘調査が実施されたことはなく、昭和 56 年 6 月から 7 月にかけて当該地の南に接するところでマンションの建設に伴い大阪府教育委員会が発掘調査を実施した例があるのみであり、遺構の性格をはじめ、遺構の年代・保存状態・規模など不明なところがあった。

門真市教育委員会では、平成 24 年度から歴史遺産整備事業を実施することになり、伝茨田堤の今後の保存・整備・活用に向けての基礎資料を得る目的で、史跡指定地内に 3 箇所のトレンチを設定し、人力掘削による発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成 24 年 11 月 27 日（火）から同年 12 月 21 日（金）まで実施し、史跡の



図3 調査地位置図

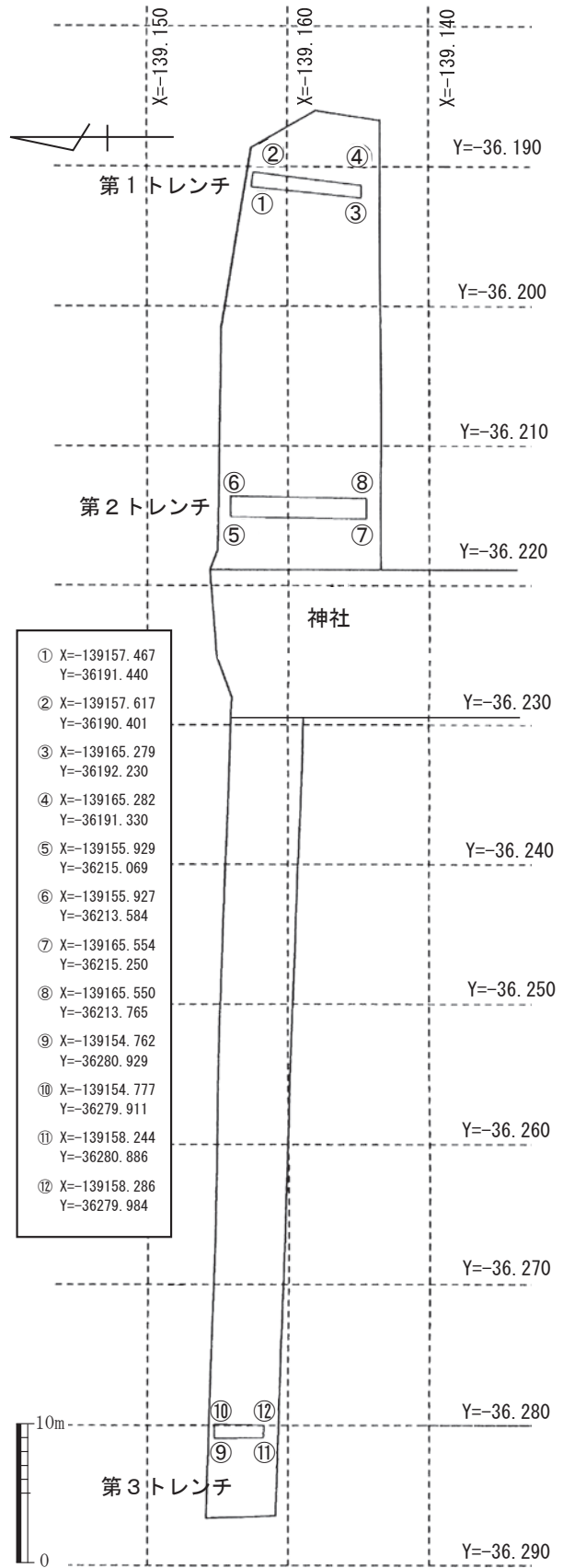


図4 調査区位置図

保存・整備・活用に必要な資料の収集に努めた。

最終的な調査の面積は第1トレンチは1×7.5 mの7.5 m²、第2トレンチは1.5×9 mに0.7×5.5 mの拡張を含めた17.35 m²、第3トレンチは2×3.5 mの7.0 m²で、合計31.85 m²を調査した。

12月1日（土）午前10時30分から午後3時30分まで現地見学会を実施したところ、他府県を含む70人の市民が見学に来場した。12月10日（月）に府立狭山池博物館工楽善通館長、小山田宏一学芸員、12月13日（木）に地震考古学研究者の寒川旭氏が来場され、貴重な助言を賜った。12月14日（金）から府教委文化財保護課の指導により、第2、第3トレンチの拡張調査を実施し、拡張前に得られた断面実測図をもとに層ごとの掘削を行い、地層ごとに遺物を採取、新たな実測図の作成、土壌のサンプル採集を行った。12月21日（金）に現地調査を終了し、12月26日に埋め戻しを完了し、撤収した。

第3章 調査成果

1. 第1トレンチにおける調査

第1トレンチは3箇所トレンチの最も東側に当たるトレンチである。現状では北側道路より0.4 m高くなっている。指定地の東端から5 mの位置に、東西方向に向かって伸びると想定される遺構に直交するよう南北方向に長方形の調査区を設定し、幅1 m、長さ7.8 m、深さ1.6 mを人力により掘削を行った。表土直下にはアスファルトが舗装された状態で確認され、その直下で得られた陶器片の年号から昭和38年以降に舗装されたと思われる。

トレンチ南端にあたる部分は、近世以降とみられる第3層により攪乱されていたが、ほかは良く締まった土層を積み上げた状況を示す遺構を確認した。土層は北に向かって高くなる形状を呈しており、上部は近現代に削平され、北側は調査区外に延びるため本来の規模は不明である。しか

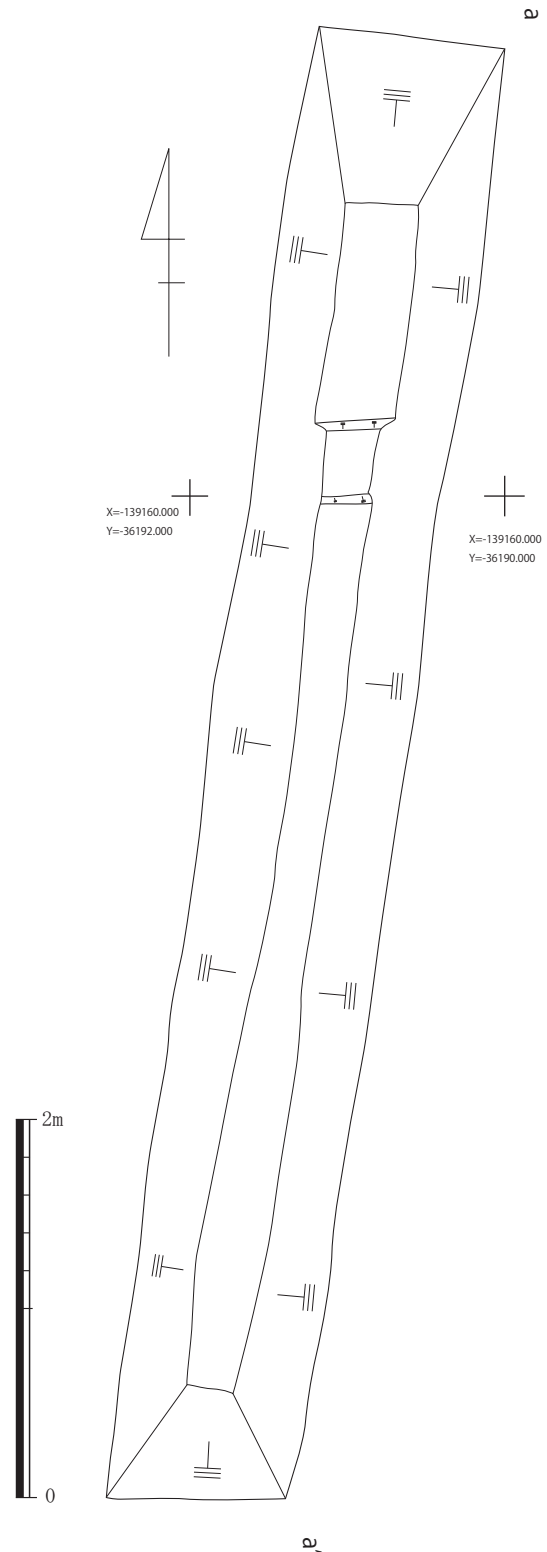


図5 第1トレンチ平面図

し確認された規模は幅 6 m 以上、高さ 1 m 以上であり、土を積み上げた遺構としてはかなり大きな規模となる。その土層断面の状況、規模と付近の地形、周辺の土地利用の状況から本遺構は「堤」の一部である可能性が高いと考えられる。盛土内からは古墳時代から中世までの土師器・須恵器・瓦器が細片が混在する形で出土しており、調査区内における最初の盛土を構成する土層からは、13 世紀に属する瓦器碗が出土した。遺構の下限もその範囲に収まるものと思われる。土層に遺構を補強するように積まれたものが認められるが、明確な時期差については不明である。以下にその詳細を記してまとめた。

層序 (図 6)

第 1 層 黄褐色粘土

層厚 20cm を測る。直径 1 ～ 3 cm の粗砂をブロック状に含む。現代までの遺物が細片で少量含まれる。

第 2 層 黄褐色粘土

層厚 10 ～ 40cm を測る。直径 5 ～ 7 cm の細礫を全体に含む。1 層と同じく現代までの遺物が少量出土した。

第 1 層と 2 層に関してはアスファルトを敷設前に高まりの高低差を緩衝するために意図的に盛られた近現代の盛土と思われる。現代の遺物とともに土師器・須恵器・瓦・瓦器・陶器が出土した。

第 3 ～ 5 層 黒褐色中～粗粒砂

掘削深度を超える深さの近現代の遺物を含む攪乱土である。土師器・須恵器・瓦・7 世紀に属すると思われる製塩土器片などが出土した。

第 6 層 明黄褐色砂混じり粘土

シルト～細粒砂を含む。層厚は 10 ～ 30cm を測る。土師器の細片を含む。

第 7 層 黄橙色砂混じり粘土

層厚は 5 cm を測る。

第 8 層 にぶい黄橙色砂混じり粘土

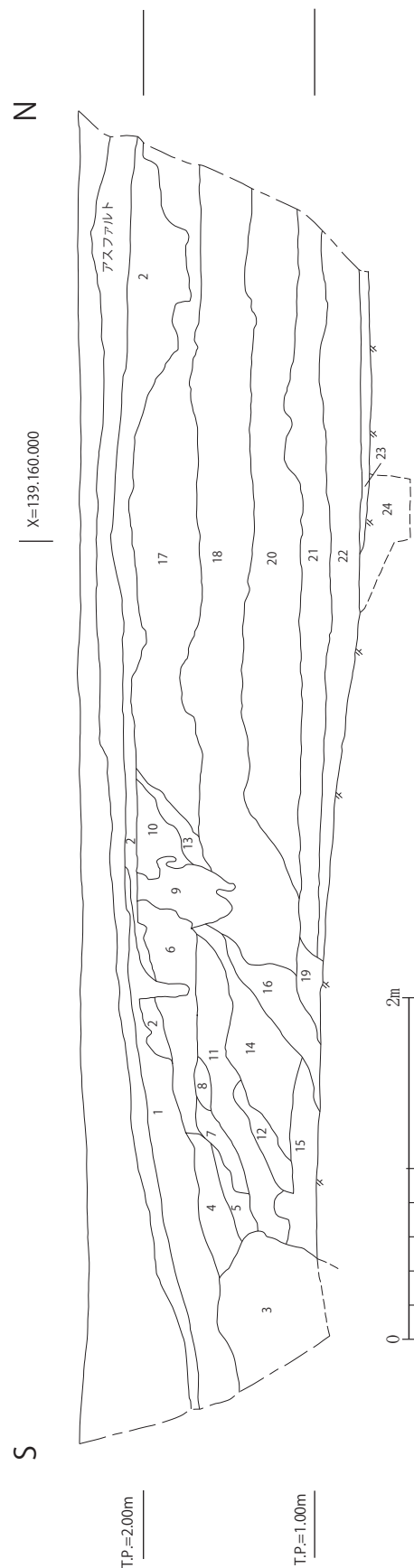


図 6 第 1 トレンチ西壁土層断面図

層厚は5cmを測る。

第6～8層は堤防状遺構の法面に貼り付けられた補強の盛土と考えられる。

第9層 にぶい黄橙色シルト～細粒砂

層厚は50cmを測る。不自然な断面形状を呈する。木の根の痕跡と考えられる。

第10層 明黄褐色砂混じり粘土

層厚は20cmを測る。粘土・シルトを含む。

第11層 にぶい黄褐色粘土

層厚は10cmを測る。粘土をブロック状に含む。

第12層 にぶい黄褐色粘土

層厚は10cmを測る。粘土をブロック状に含む。

第13層 明黄褐色砂混じり粘土

層厚は30cmを測る。粘土をブロック状に含む。

第14層 浅黄橙色砂混じり粘土

層厚は10cmを測る。粘土・シルトをブロック状に含む。

第10～14層は粘土をブロック状に含んだ土であり、第6～8層と同じく法面に対して土を貼り付けるように盛られた補強の盛土と考えられる。

第15層 灰褐色シルト質粘土

層厚は15cmを測る。補強の盛土のベースと考えられる。

第16層 黒褐色粘土

層厚は15cmを測る。シルトをブロック状に含む。本層は傾斜法面を覆うように盛り上げられたものと考えられる。

第17層 にぶい黄褐色砂混じり粘土

層厚は40cmを測る。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

第18層 灰黄褐色砂まじり粘質土

層厚は30～40cm。シルト・炭を含む。土師器・須恵器が出土した。

第19層 灰褐色粘土

細粒砂を含む。滞水性の堆積土と思われる。

第20層 にぶい黄褐色砂混じり粘土

層厚は30cmを測る。シルトを含む。土師器・瓦器が出土した。

第21層 暗褐色粘土

層厚は15cmを測る。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

第22層 黒褐色粘土

層厚は20cmを測る。瓦器碗が出土した。

第23層 にぶい黄褐色シルト

層厚は5cmを測る。細粒砂を含む。土師器が出土した。細片のため時期は不明である。

第24層 灰褐色シルト質粘土

第24層部分は地山層確認のため部分的に深く掘削した。これ以下は湧水が著しく掘削を断念した。第24層については遺物の出土はなかった。

出土遺物 (図7)

1・2は土師皿である。どちらも13世紀のものであり、第17・18層を掘削中に出土した。3・4は須恵器杯蓋である。第21・22層を掘削中に出土した。3は6世紀、4は7世紀に属する。5・6は瓦器椀である。5は底部のみ残存、高台部分は小さく貼りつけであり、断面は三角形を呈する。第19層から出土した。6はいわゆる「樟葉型瓦器椀」である。内外面を密に磨く。どちらも13世紀のものである。7は火舎である。内傾する口縁部に貼り付けた2条の凸帯の内側に判による陽刻を施す。14～15世紀のものと思われる。8は縄目タタキを施された平瓦。9は巴文軒丸瓦である。江戸時代に属する。7・9は第3層、8は2層から出土した。2・3層は近現代の遺物を含む攪乱層であり、混入品と思われる。

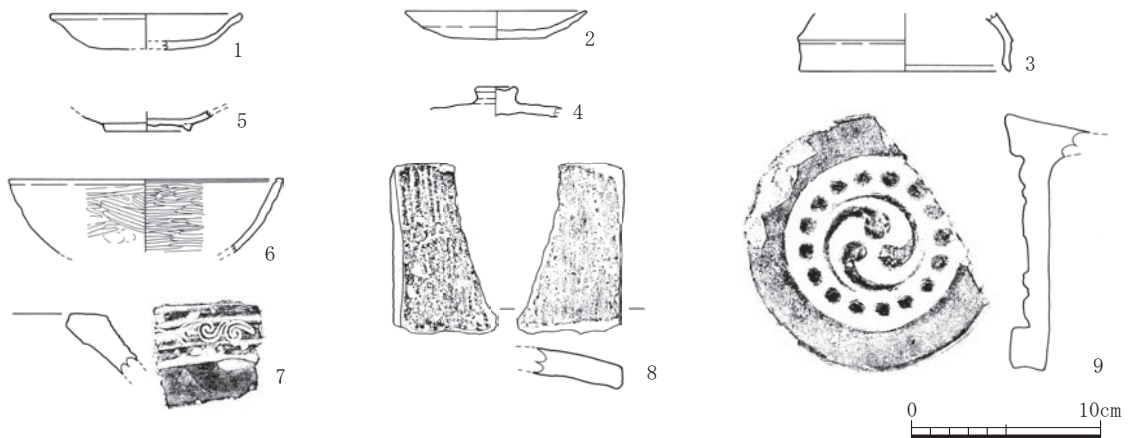


図7 第1トレンチ出土遺物実測図

2. 第2トレンチにおける調査

第2トレンチは3箇所のトレンチの中央部分にあたるトレンチである。現状では北側道路より1 mあまり高くなっている。指定地の東端から西へ27 mを測る場所に遺構推定地に直交する形で南北方向に幅1.5 m、長さ9 mを測るトレンチを設定した。(後に平面調査を行うため中央部分を東に0.7 m拡張させた。)深さは最大2.6 mを人力により掘削した。トレンチの南端と北端に広範囲に攪乱があり、両裾端部は攪乱のため第1トレンチと同じく情報を得ることは出来なかったが、中央部分の盛り上がり最もよく残った調査区であったといえる。

本トレンチにおいて慶長の伏見地震(1596)によるものと思われる噴砂が発生した状況を確認した。第16・17層上面では東西方向の溝およびピットを検出した。調査地から須恵器・土師器・瓦・瓦器など古墳時代～中世の遺物が出土した。このトレンチにおける地山直上の層と考えられる第23層からは13世紀の瓦器椀が出土したことから、本調査区において盛土された時期は13世紀と考えられる。

層序 (図9)

第1層 明黄褐色細～粗粒砂

第2層 黒色粘質土

瓦礫・炭・アスファルトを含む。中央部において不自然な断面形を呈する部分は木の根の痕跡と思われる。

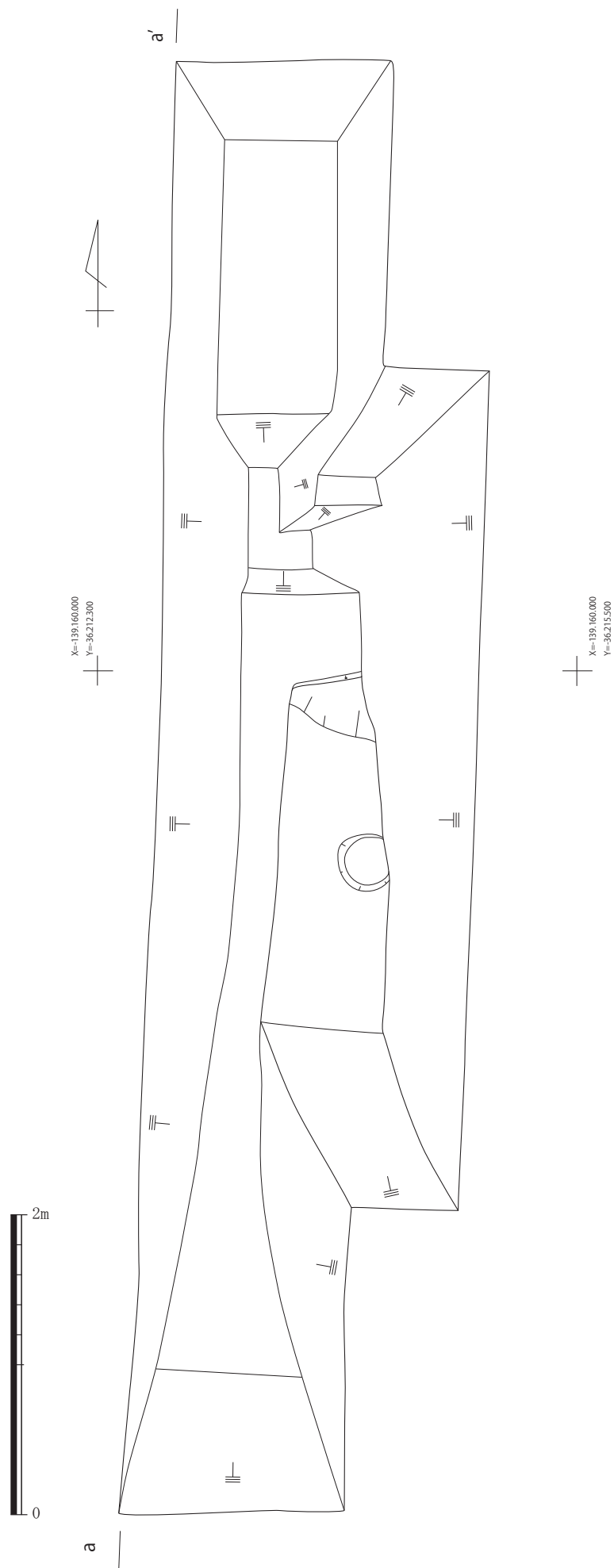


図8 第2トレンチ平面図

第1・2層は近現代の遺物を含む攪乱層である。

第3層 明黄褐色シルト～細粒砂

層厚は20cmを測る。亀裂に向かって落ち込む形状の部分がみられた。周囲の状況から地震によって生じた亀裂に木の根が入り込み、これが風化して本層が落ち込んだと思われる。炭・土師器・14世紀代と考えられる白磁が出土した。

第4層 褐色砂まじり粘質土

層厚は10cmを測る。粘土をブロック状に含む。焼土・炭を含む。

第5層 にぶい黄褐色砂混じり粘土

層厚は20cmを測る。シルト～細粒砂をブロック状に含む。土師器が出土した。

第6層 褐色砂まじり粘質土

地震の影響により乱れたと考えられる断面を呈する。炭・焼土を含む。

第7層 にぶい黄褐色砂混じり土

層厚は30cmを測る。粘土を上方にブロック状に含む。シルト～細粒砂を含む。

第3層は上部が削平を受けたため不明であるが、第4～7層は法面に土を盛り上げた状況であることを確認した。地震によりかなり乱れた形状を呈しており、地震の震度が大きなものであったことが伺える。

第8層 にぶい黄褐色砂混じり土

層厚は30cmを測る。シルト～細粒砂・炭を含む。土師器が出土した。

第9層 にぶい黄褐色砂混じり土

層厚10cmを測る。シルト～細粒砂、炭・焼土を含む。

第10層 暗褐色砂まじり粘質土

層厚最大50cmを測る。焼土・炭・粘土をブロック状に含む。土師器が出土した。

第11層 にぶい黄褐色砂混じり土

層厚5cm。細粒砂・焼土・粘土をブロック状に含む。土師器が出土した。

第12層 明黄褐色砂混じり土

層厚20cmを測る。シルト～細粒砂・炭・焼土を含む。

第13層 にぶい黄褐色砂混じり土

層厚30cmを測る。粘土をブロック状に含む。

第8～13層は堤防状遺構を形成する層である。南方に向かって薄く、北方に向かって厚く高く積み上げられていた。

第14層 明黄褐色シルト～細粒砂

層厚20cmを測る。炭を含む。土師器・瓦器が出土した。

第15層 灰黄褐色シルト～細粒砂

層厚は10cmを測る。焼土・炭を含む。土師器が出土した。

第15層以下は本トレンチ全体にわたって水平に近い形で広がっており、堤防状遺構は本層の上面に築かれたことがわかった。第14層が液状化し噴き上がる、いわゆる「噴砂」が発生した状況を確認することができた。

第16層 灰黄褐色シルト～細粒砂

掘削深度を超えていたため層厚は不明である。焼土・炭を含む。

第 17 層 暗褐色砂混じり粘質土

層厚は 10cm を測る。シルト～細粒砂・炭・焼土を含む。

第 16・17 層上面において東西方向の溝 1 条、ピット 1 基を検出した。埋土はどちらも黄灰色シルト～細粒砂であり、溝 1 からは時期不明の土師器片が出土した。

第 18 層 にぶい黄橙色砂混じり土

層厚は 10cm を測る。シルト～細粒砂を含む。

第 19 層 暗褐色砂混じり粘土

層厚は 15cm を測る。シルトを含む。水分が少なく固く締まる。13 世紀に属する瓦器碗が出土した。

第 20 層 にぶい黄橙色砂混じり粘土

層厚は 15cm を測る。シルトを含む。水分が少なく固く締まる。

第 21 層 暗褐色砂混じり粘土

層厚は 5cm を測る。シルトを含む。水分が少なく固く締まる。

第 22 層 にぶい黄橙色砂混じり粘土

層厚は 18cm を測る。シルトを含む。水分が少なく固く締まる。

第 23 層 暗褐色砂混じり粘土

層厚は 20cm を測る。シルトを含む。水分が少なく固く締まる。

第 24 層 暗灰色砂混じり粘土

層厚は掘削深度を超えるため不明。細粒砂～粗粒砂を含む。第 1・2 層の下層に位置するが、土質が異なるため下層の堆積土の一部であると判断した。

第 25 層 にぶい黄橙色砂混じり粘土

層厚は 10cm を測る。シルト含む。水分が少なく固く締まる。

第 26 層 褐灰色粘土

層厚は掘削深度を超えるため不明。水分が多く粘度が高い。遺物は出土しなかった。

第 1・2 層を除いた第 3 層から第 13 層までは堤防状遺構の積み土であると思われる。伏見地震 (1596) により、大きく地層が乱れた状態であることを確認した。堤防状遺構には亀裂が入り、第 3 層の土がそこに落ち込み、第 14 層の砂質粘土が逆に噴き上がるように上層に食い込んでいた。この他にも細かく生じた亀裂に下層の土が巻き上げられている状況、土層が断層状にズレを生じさせている状況などがみられた。地震考古学者寒川旭氏によると、「このような現象が起きるのは少なくとも震度 6 以上の地震が生起したと想定され、広範囲に多大な影響があったものと考えられる。」との教示を得た。地震の影響で第 14 層は液状化で乱れた状況であるため判断しがたいが、第 15 層以下では水平堆積の様相を呈しており、第 16・17 層上面においては東西方向に伸びる溝、ピットを検出した (図 8)。いずれも埋土は上層の 15 層が落ち込む形であり、遺物は出土しなかったが、第 15 層から土を積み上げた状況が確認された。第 16～23 層にかかる遺構の時期や性格は調査範囲が狭く断定できないが、第 15 層から始まる堤防状遺構に先行する堤防状遺構の堆積となる可能性がある。本トレンチにおいても第 1 トレンチと同じく何回かの補修・改築があったことが考えられるが、積極的にそれを裏付けるようなものは遺物・遺構の点からも

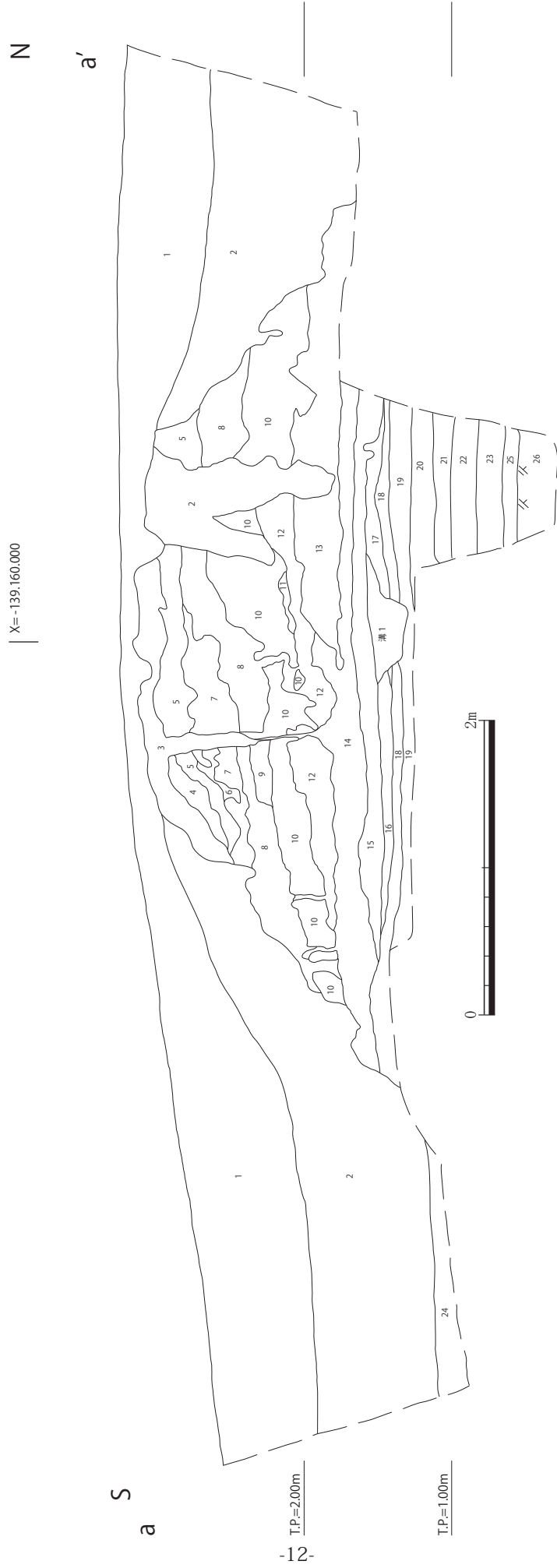


図9 第2トレンチ西壁土層断面図

確認できなかった。

出土遺物 (図 10)

10～14は土師皿である。10は第14層から出土した。11は第16層、12・14は第12層、13は第15層。11は11～12世紀のものと考えられる。10・12・13は13世紀のものと考えられる。15・16は玉縁状口縁をもつ白磁碗である。15は第20層、16は第3層から出土した。15は12～13世紀のものであり、トレンチにおける最下層出土遺物である。16は12世紀に属すると思われる。17は東播系捏鉢である。口縁が広く開く外形を呈すると思われる。13世紀の所産である。第16層より出土した。18～20は須恵器である。18は杯蓋、19は4方向のスカシ孔を有する高杯脚部である。20は器台である。外面には波状文を施し、台形状のスカシ孔を千鳥状に有する。18は第1層から、19は第15層から、20は第7層から出土した。どちらも6世紀に属するものである。21～30は瓦器碗である。21は大和型瓦器碗である。内面には密に暗文を施し、外面はナデで仕上げる。口縁部には段を有する。13世紀前半の所産。調査区南端の攪乱から出土した。22は大和型瓦器碗である。外面にはナデ後暗文、内面には密に暗文を施す。口縁端部にはヨコナデにより段を持つ。12世紀に属する。第8層掘削中に出土した。23は大和型瓦器碗である。外面にはナデ後まばらに暗文、内面には密に暗文を施す。口縁端部はナデにより段を持つ。第10～12層掘削中に出土した。13世紀中頃に属する。24は大和型瓦器碗である。内外面ともに密に暗文を施す。口縁部外面はナデによりわずかに外反する。口縁端部はヨコナデにより段を持つ。12世紀前半に属する。第1層より出土した。25は和泉型瓦器碗である。内面は風化のため調整不明、外面には暗文が残る。外面口縁部はナデによりわずかに外反する。12世紀後半のもの。第14層より出土した。26は見込みに暗文が残る底部である。高台は貼りつけであり断面三角形を呈する。13世紀に属する。第10～12層掘削中に出土した。27は見込みに暗文の残る底部。高台は貼りつけでありやや丸みを持つ断面を呈する。13世紀に属する。28は風化により調整不明、高台は貼りつけであり断面三角形を呈する。13世紀に属する。第14層から出土した。29は面を持つ高台を有する。13世紀前半の所産。第16層から出土した。30は内外面ともにナデを施す底部である。

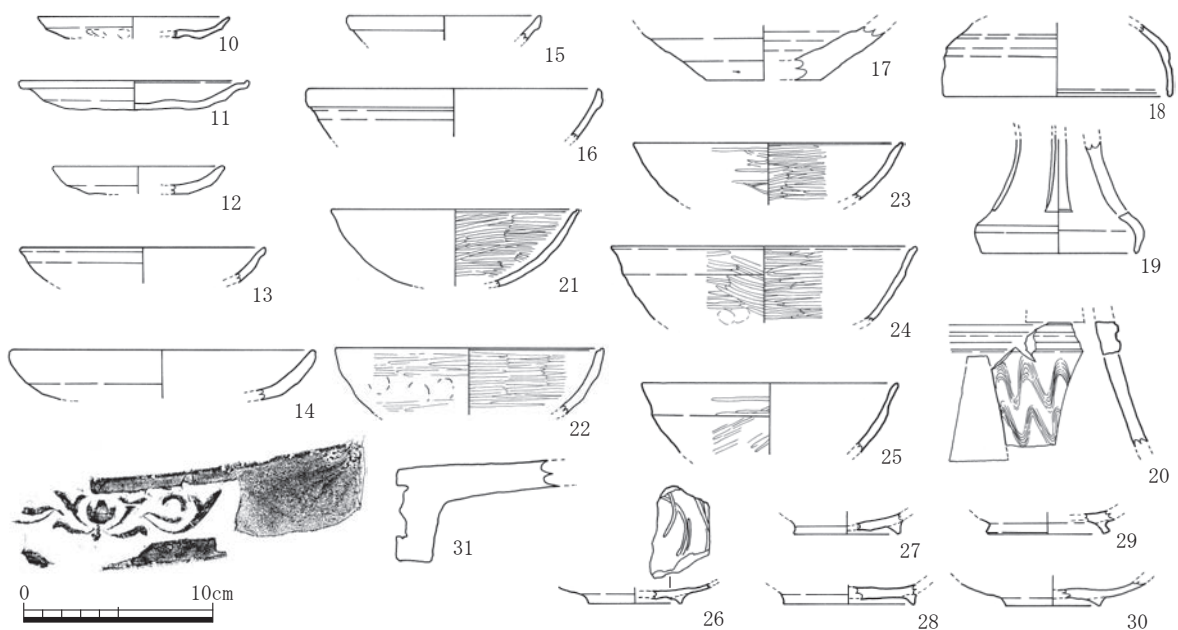


図 10 第2トレンチ出土遺物実測図

高台は貼りつけであり断面三角形を呈する。13世紀に属する。第17層掘削中に出土した。31は軒平瓦。南端の攪乱より出土した。近世に属する。

11の土師器、18～20の須恵器などを含むものの、全体の出土遺物としては13世紀の遺物が主体であった。最下層の出土遺物は12～13世紀に属するものであり、本トレンチにおける堤防状遺構の築造年代もこれを下限と考えられる。

3. 第3トレンチにおける調査

第3トレンチは現状においては北側に面した道路とほぼ同じ高さとなっている。本トレンチは指定地における西端付近に設定した。南北方向に3.5m、幅1m（のちに平面調査を行うために2mに拡張した）の調査区を第1・2トレンチと同じく遺構推定地に直交する形で設定し、深さ1.9mを人力により掘削した。本調査区においても他2本と同じく傾斜をもった断面構造が確認できた。堤防状の遺構の一部であると思われる。なお、今回の調査で本トレンチにおいて最も多量の古墳時代の須恵器が出土したことから付近に当該期の集落があることも考えられるが、本調査において関連の遺構などは検出できなかった。

層序（図12・13）

第1層 黒褐色粘質土

層厚は30cmを測る。1～3cm大の礫含む、木の根、塩化ビニール管、炭含む。

第2層 黒褐色粘質土

層厚は20cmを測る。1～3cm大の礫含む、細砂を上方に含む。

第3層 にぶい黄褐色粘土

層厚は50cmを測る。締り悪く水分量少ない、土師器、炭を含む。

第1～3層は近現代の遺物を含む攪乱層である。

第4層 灰色粘土およびにぶい黄褐色粘質土の混和土

層厚は20cmを測る。土師器・須恵器・炭を含む。

第5層 褐色粘土

層厚は20cmを測る。極細粒砂を含む、土師器、炭を含む。

第6層 にぶい黄褐色粘土

層厚は10cmを測る。極細粒砂を含む、炭を含む。

第7層 灰黄褐色粘土

層厚は20cmを測る。締り悪く水分量少ない。

第8層 褐灰色シルト混粘土

層厚は20cmを測る。炭・土師器を・須恵器を含む。

第4～8層は南方に向かって高くなるように積み上げられていた。本トレンチにおける堤防の頂部はトレンチより南方に位置すると思われる。第5～8層で形成された傾斜に対して貼り付くような形で第4層が盛り上げられていた。

第9層 にぶい黄褐色

層厚は20cmを測る。シルト～細粒砂・土師器・焼土を含む。

第10層 灰黄褐色粘土

- 層厚は 25cm を測る。瓦器片を含む。
- 第 11 層 灰黄褐色粘土
層厚は 15cm を測る。シルトを含む。
- 第 12 層 黄灰色粘土
層厚は 10cm を測る。土師器を含む。
- 第 13 層 暗灰黄色粘土
層厚は 10cm を測る。水分量少なく硬く締まった粘土。
- 第 14 層 灰黄色粘土
層厚は 10cm を測る。水分量少なく硬く締まる。瓦器碗の底部が出土した。
- 第 15 層 暗灰黄色粘土
層厚は 10cm を測る。粘土をブロック状に含む。
- 第 16 層 黒褐色粘土
層厚は 10cm を測る。土師器・須恵器を含む。
- 第 17 層 灰黄褐色粘土
層厚は 20cm を測る。細粒砂を含む。
- 第 18 層 灰黄褐色シルト
層厚は 6 cm を測る。細粒砂を含む。東西方向の鋤溝の埋土である。
- 第 19 層 にぶい黄橙砂混り粘土
層厚 10cm を測る。遺構埋土かと思われたが平面的な形状は不明。
- 第 20 層 黒褐色粘土
層厚 20cm を測る。水分量、粘度少ない。土師器を含む。
- 第 21 層 灰黄褐色粘土

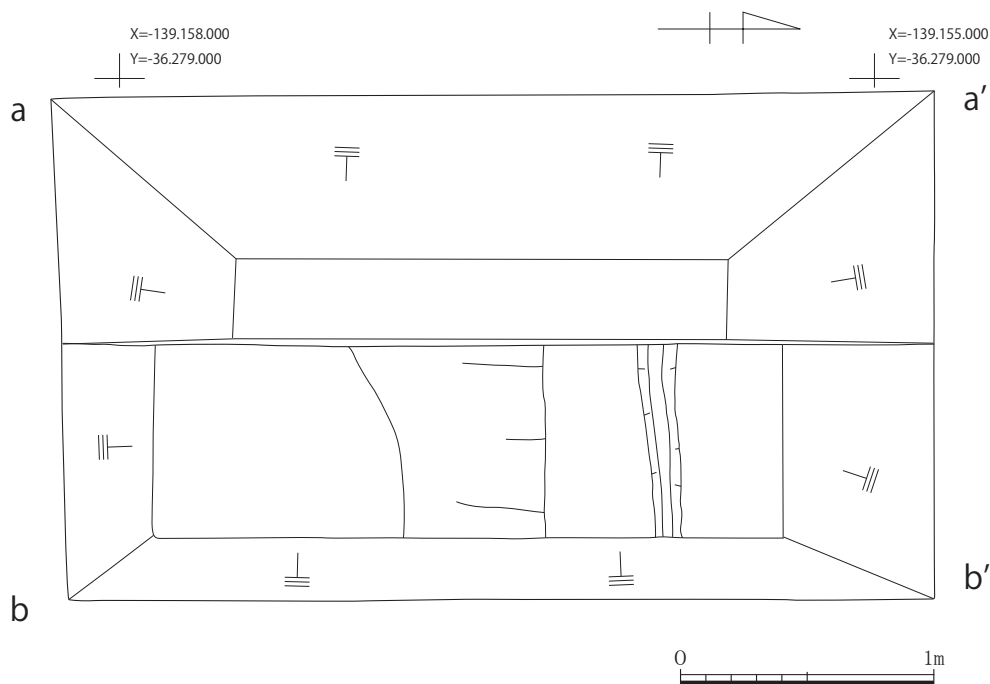


図 11 第 3 トレンチ平面図

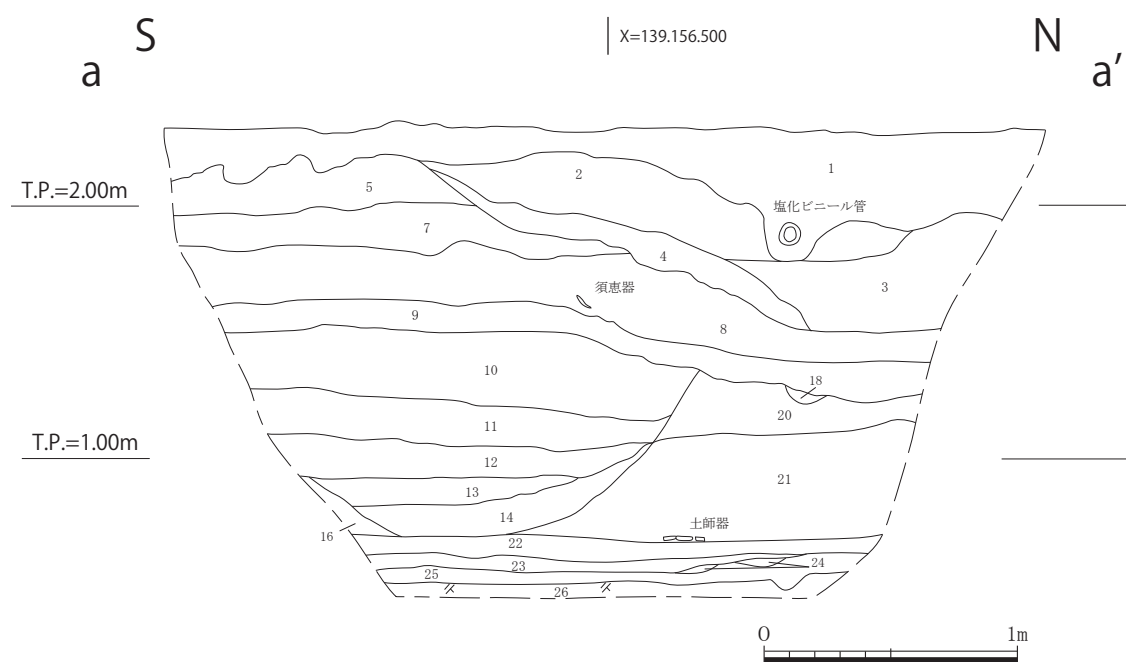


図12 第3トレンチ西壁土層断面図

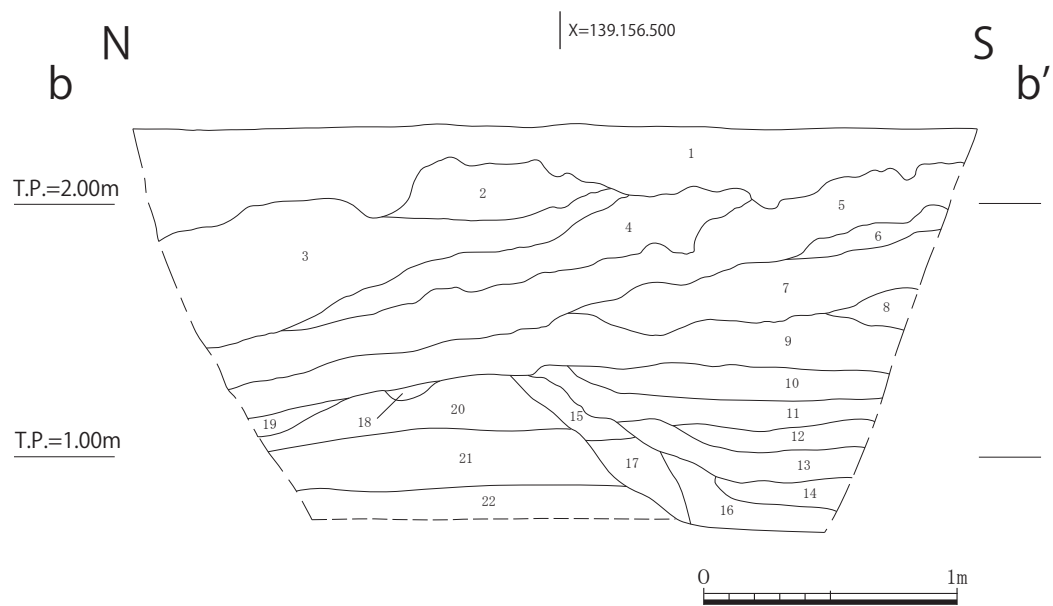


図13 第3トレンチ東壁土層断面図

層厚 20cm を測る。水分量・粘土少ない。土師器（上面にて土師器が出土したが、風化が激しく、時期の特定には至らなかった。）・炭を含む。

第 22 層 黒褐色粘土

層厚 10cm を測る。水分量多い。

第 23 層 褐灰色粘土

層厚 8 cm を測る。

第 24 層 灰色粘土

層厚 6 cm を測る。上面において、灰黄褐色シルト～細粒砂を埋土とする遺構があった。平面形は確認できず、遺物などは出土しなかった。

第 25 層 灰色粘土

掘削深度を超えるため層厚は不明。

第 22 層以下は概ね水平堆積であった。大畦畔と思われる堤防状遺構は本層の上面に造られたことがわかった。

第 20・21 層により構成される大畦畔と考えられる遺構があり、畦畔の南側には低湿地にみられるような粘土の堆積が層状にみられ（第 12～14 層）、水田のような滞水性の遺構であったことが伺える。この低地は第 10・11 層をもって若干の高さをもって埋められており、上部には土壌化が観察できることから意図的な土地利用の目的があったと考えられる。第 18 層として検出した東西方向の溝は規模と形状から鋤溝と思われるが、本遺構が大畦畔に伴うものであるか第 10 層上面の時期に属するものであるかは不明である。以後この面に対して土を盛り上げていく状況が第 6 層から第 9 層にわたってみられ、堤防状の遺構が築かれたと考えられる。

出土遺物（図 14）

32～34 は土師皿である。32 は外面にヨコナデによりわずかに段をもつ。第 3～7 層出土。13 世紀前半に属する。33・34 は風化により調整不明。どちらも第 8 層から出土した。13 世紀に属する。35～43 は須恵器である。35～38 は高杯。35 は 2 方向のスキャン孔を持つ。5 世紀の所産である。第 11～14 層出土。36・37 は 5～6 世紀のものと考えられる。どちらも第 8 層出土。38 はスキャン孔の残る杯部である。6 世紀後半のものである。第 13・14 層から出土した。39 は短頸壺である。体部に自然釉が残る。6 世紀のもの。第 3～7 層より出土。40～43 は杯身である。40 は口縁端部にヨコナデによる沈線を巡らせる。5 世紀後半のもの。第 13～14 層出土。41 は 6～7 世紀のものと考えられる。第 3～7 層より出土した。42 は杯身にヘラによる沈線を施す。6 世紀のものである。第 13～14 層より出土した。43 は 6 世紀後半のもの。第 14 層より出土した。44～46 は瓦器碗である。44 は樟葉型。口縁端部のやや下がった位置に 1 条の沈線を施す。内外面の摩滅が激しく、調整は不明である。12 世紀末のものと考えられる。第 8 層から出土した。45 は黒色土器である。内外面の風化が激しく、調整は不明瞭であるが、外面にわずかにミガキが残る。11 世紀のもの。第 8 層から出土した。46 は和泉型である。内外面に密なミガキを施す。口縁端部は丸くおさめる。12 世紀末～13 世紀のもの。第 8 層から出土した。47 は白磁碗である。玉縁状の口縁部を有する。12 世紀のものである第 9 層から出土した。

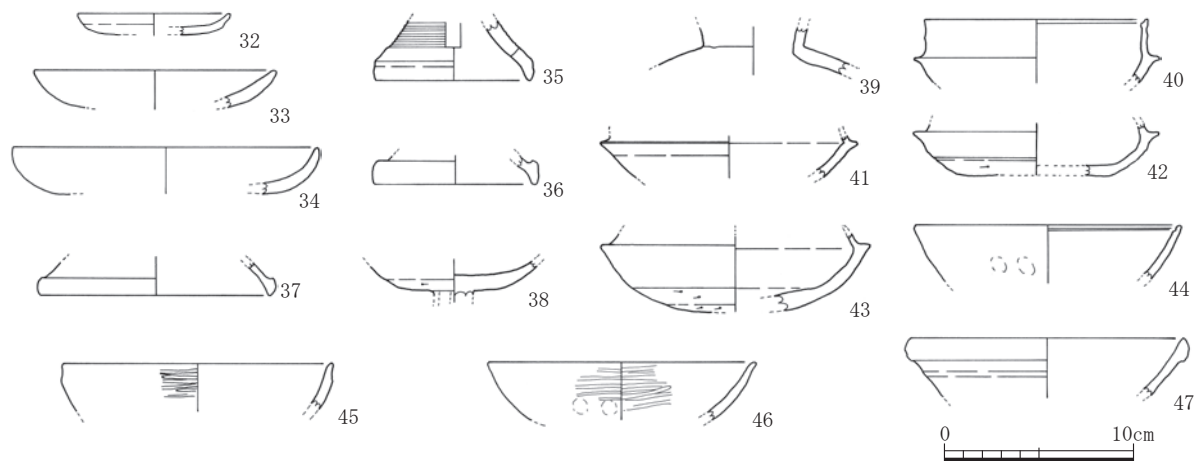


図 14 第 3 トレンチ出土遺物実測図

第 4 章 まとめ

3 箇所のトレンチでそれぞれに土を積み上げた堤防状の遺構が確認された。第 1・第 3 トレンチは遺構の上部が北側道路とほぼ同じ高さまで削平されており、第 2 トレンチは北側道路より約 1 m 高く、地山からは高さ 2.4 m、幅は 9 m 以上の規模で残存していることが確認された。第 1 トレンチは地山直上から土を盛り上げた鎌倉時代の堤防状の遺構が確認された。第 2 トレンチは鎌倉時代の溝状遺構の上に土を積み上げている状況が確認された。第 3 トレンチは地山直上に中世の水田状遺構があることを確認し、その上に古墳時代から鎌倉時代の土器を含む土を堤防状に積み上げている状況が確認された。

調査では各トレンチから堤防状の遺構が確認され、出土した土器からは堤防状の遺構が鎌倉時代より新しくなる資料は認められず、当該期に堤防状の遺構が築かれたと考えられる。第 2 トレンチの第 14 層より上部の土層が軟化していることについては、慶長の伏見地震（1596 年）による液状化で土を積み上げた遺構が崩れ、軟化したものと思われる。

発掘調査で確認された堤防状の遺構は鎌倉時代に築かれて以来、大きな補修もなく現代に伝えられたと考えられる。遺構を構成する土壌は細粒の砂混じりのシルトや粘土であり、伝茨田堤周辺を含む門真市域でみられる水分を多く含む粘土や砂の土壌とは異なることから、伝茨田堤の遺構を構成する土壌は別のところで採取され、古川につながる水系流域から舟などで運ばれ積み上げられたものである可能性がある。また出土した土器は古墳時代から鎌倉時代の土器が認められるが、いずれも細片であり、摩耗が認められるものもあることから、当該地で使用していたものばかりでなく他所で採取した土に含まれていた土器もあると考えられる。

今回の調査において、『茨田堤』が築かれ記録に現れる古墳時代～平安時代に遡る遺構は確認できなかったが、土器の出土から周辺に遺構が存在することが十分に考えられる。今後の調査で古代の遺構が確認されるのを待ちたい。

表 1 第 1 トレンチ出土遺物観察表

挿図 番号	種 類	器 種	法量 (cm)	色 調	焼 成	残存率	胎 土	技法の 特徴	備 考	
1	土師器	皿	口径：(10.0) 器高：1.8 底径：－	外：10YR8/4 浅黄橙 色 内：10YR8/4 浅黄橙 色	良好	約 25%	良		第 1 トレンチ 第 17・18 層出土	
2	土師器	皿	口径：9.4 器高：1.4 底径：－	外：10YR8/2 灰白色 内：10YR8/2 灰白色	良好	約 50%	良		第 1 トレンチ 第 18 層出土	
3	須恵器	杯蓋	口径：(10.0) 器高：残 3.0 底径：－	外：7.5Y5/1 灰色 内：N7/ 灰白色	良好	約 10%		2～3mm の 長石含む	第 1 トレンチ 第 21 層出土	
4	須恵器	蓋	口径：－ 器高：残 1.3 つまみ部： 2.3	外：5Y6/1 灰色 内：N7/ 灰白色	良好	約 10%	良		第 1 トレンチ 第 21～22 層出土	
5	瓦器	椀	口径：－ 器高：残 1.0 底径：(4.5)	外：5Y5/1 灰色 内：5Y5/1 灰色	不良	約 10%	良		第 1 トレンチ 第 21～22 層出土	
6	瓦器	椀	口径：(14.2) 器高：残 3.8 底径：－	外：5Y6/1 灰色内： N4/ 灰色	良好	約 30%	密	樟葉型	第 1 トレンチ 第 17・18 層出土	
7	瓦器	火舎	口径：残 4.2 器高：残 2.0 底径：－	外：5Y5/1 灰色 内：5Y7/1 灰白色	良好	約 10%	密		第 1 トレンチ 南端落込	
8	瓦	平瓦	長さ：残 8.8 幅：残 5.4 厚み：1.4	外：5Y5/1 灰色 内：5Y4/1 灰色	良好	約 10%		径 1～4mm の長石・ チャート含 む	縄目圧 痕	第 1 トレンチ 表土直下
9	瓦	軒丸瓦	厚み：1.9 瓦当径：13.2	外：5Y4/1 灰色 内：2.5Y6/2 灰黄色	良好	約 10%	密 はなれ 砂使用	巴文	第 1 トレンチ 南端落込	

表2 第2トレンチ出土遺物観察表1

挿図 番号	種 類	器 種	法量 (cm)	色 調	焼 成	残存率	胎 土	技法の 特徴	備 考
10	土師器	皿	口径：(10.0) 器高：残 0.9 底径：－	外：10YR8/3 浅黄橙 色 内：10YR8/3 浅黄橙 色	良好	約 10%		径 1～2mm のクサリ礫 含む	第2トレンチ 第14層出土
11	土師器	皿	口径：(11.8) 器高：1.5 底径：－	外：5YR8/4 淡橙色 内：5YR8/4 淡橙色	良好	口縁～底部 約 10%	密		第2トレンチ 11～12世紀 第16層出土
12	土師器	皿	口径：(8.8) 器高：残 1.5 底径：－	外：7.5YR8/3 浅黄橙 色 内：7.5YR8/3 浅黄橙 色	良好	約 10%	密		第2トレンチ 第12層出土
13	土師器	皿	口径：(12.6) 器高：残 1.8 底径：－	外：7.5YR8/3 浅黄橙 色 内：7.5YR8/4 浅黄橙 色	良好	約 10%	良		第2トレンチ 第15層出土
14	土師器	皿	口径：(15.6) 器高：残 2.1 底径：－	外：7.5YR8/4 浅黄橙 色 内：7.5YR8/4 浅黄橙 色	良好	口縁約 10%	密		第2トレンチ 第12層出土
15	白磁	椀	口径：(10.0) 器高：残 1.3 底径：－	外：5YR8/1 灰白色 内：2.5GY8/1 灰白色	良好	口縁小片	密		第2トレンチ 第20層出土
16	白磁	椀	口径：(16.5) 器高：残 2.2 底径：－	外：2.5GY8/1 灰白色 内：2.5GY8/1 灰白色	良好	約 10%	良		第2トレンチ 第3層出土（填砂発 生層）
17	東播系 須恵器	捏鉢	口径：－ 器高：残 2.8 底径：(3.0)	外：2.5GY6/1 オリー ブ灰色 内：7.5Y5/1 灰色	良好	約 10%		径 1～2mm の長石含む	第2トレンチ 第16層出土
18	須恵器	杯蓋	口径：(12.0) 器高：残 3.9 底径：－	外：5Y5/1 灰色 内：N7/ 灰色	良好	約 10%		径 1mm の長 石含む	第2トレンチ 第1層出土
19	須恵器	高杯	口径：－ 器高：残 5.9 底径：(8.0)	外：2.5Y8/3 淡黄色 内：2.5Y7/1 灰白色	良好	約 10%		径 1～2mm の長石含む	4方向 スカシ 孔 第2トレンチ 第15層出土
20	須恵器	器台	口径：－ 器高：残 6.5 底径：－	外：N7/ 灰白色 内：N7/ 灰白色	良好	破片	精緻	外面波 状文 台形状 スカシ 孔	第2トレンチ 第7層出土

表3 第2トレンチ出土遺物観察表2

挿図 番号	種 類	器 種	法量 (cm)	色 調	焼 成	残存率	胎 土	技法の 特徴	備 考
21	瓦器	椀	口径：(12.8) 器高：残 4.0 底径：—	外：N4/ 灰色 内：N5/ 灰色	良好	約 20%	良	大和型	第2トレンチ 南側攪乱
22	瓦器	椀	口径：(16.0) 器高：残 3.7 底径：—	外：N4/ 灰色 内：N5/ 灰色	良好	約 10%	良	大和型	第2トレンチ 第7層出土
23	瓦器	椀	口径：(14.0) 器高：残 3.0 底径：—	外：N6/ 灰色 内：N6/ 灰色	良好	約 10%	良	大和型	第2トレンチ 第10～12層
24	瓦器	椀	口径：(16.0) 器高：残 3.9 底径：—	外：N6/ 灰色 内：N5/ 灰色	良好	約 10%	良	大和型	第2トレンチ 第1層出土
25	瓦器	椀	口径：(13.2) 器高：残 3.6 底径：—	外：N4/ 灰色 内：N4/ 灰色	良好	約 10%	良	和泉型	第2トレンチ 第14層
26	瓦器	椀	口径：— 器高：残 0.9 底径：(4.8)	外：5Y5/1 灰色 内：5Y6/2 灰オリーブ色	良好	約 10%	良		第2トレンチ 柱状セクション 第10～12層
27	瓦器	椀	口径：— 器高：残 1.1 底径：(5.4)	外：N6/ 灰色 内：7.5Y 8/1 灰白色	良好	約 10%	径 1～2mm の長石含む		第2トレンチ 第14層
28	瓦器	椀	口径：— 器高：残 1.0 底径：(6.8)	外：N4/ 灰色 内：N4/ 灰色	良好	約 10%	良		第2トレンチ 第14層
29	瓦器	椀	口径：— 器高：残 1.2 底径：(3.0)	外：7.5Y8/1 灰白色 内：N5/ 灰色	良好	約 10%	径 1～2mm の長石含む		第2トレンチ 第16層出土
30	瓦器	椀	口径：— 器高：残 1.2 底径：(4.8)	外：N4/ 灰色 内：N5/ 灰色	良好	約 30%	径 1～2mm の石英含む		第2トレンチ 第17層出土
31	瓦	軒平瓦	幅：残 8.5 厚：(4.7)	外：7.5Y4/1 灰色 内：5Y5/1 灰色	良好	約 20%	径 1～2mm の長石含む	均整唐 草文	第2トレンチ 南側攪乱出土

表4 第3トレンチ出土遺物観察表

挿図 番号	種 類	器 種	法量 (cm)	色 調	焼 成	残存率	胎 土	技法の 特徴	備 考
32	土師器	皿	口径：8.0 器高：1.1 底径：－	外：5YR7/6 橙色 内：5YR7/6 橙色	良好	口縁部 約 25%	精緻		第3トレンチ 第3～7層出土
33	土師器	皿	口径：12.6 器高：2.0 底径：－	外：7.5YR8/4 浅黄橙 色 内：7.5YR8/4 浅黄橙 色	良好	口縁部 約 10%	径1～2mm のクサリ礫 含む		第3トレンチ 第8層出土
34	土師器	皿	口径：16.0 器高：2.4 底径：－	外：10YR8/3 浅黄橙 色 内：10YR8/3 浅黄橙 色	良好	口縁部のみ 約 10%	径1～2mm のクサリ礫 含む		第3トレンチ 第8層出土
35	須恵器	高杯	口径：－ 器高：残 3.2 底径：8.0	外：N7/ 灰白色 内：N7/ 灰白色	良好	脚部約 15%	精緻		第3トレンチ 第6～14層出土
36	須恵器	高杯	口径：－ 器高：残 1.3 底径：8.6	外：N8/ 灰白色 内：N8/ 灰白色	良好	脚部約 15%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第8層
37	須恵器	高杯	口径：－ 器高：残 1.7 底径：12.0	外：N8/ 灰白色 内：N8/ 灰白色	良好	脚部約 15%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第8層
38	須恵器	高杯	口径：－ 器高：残 1.8 底径：－	外：N8/ 灰白色 内：N8/ 灰白色	良好	杯部約 10%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第13～14層出土
39	須恵器	短頸壺	口径：－ 器高：残 2.9 底径：－	外：N6/ 灰色 内：N8/ 灰白色	良好	口縁部 約 20%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第3～7層相当
40	須恵器	杯身	口径：11.8 器高：残 3.1 底径：－	外：N7/ 灰白色 内：N7/ 灰白色	良好	口縁部 約 10%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第13～14層出土
41	須恵器	杯身	口径：－ 器高：残 2.4 底径：－	外：N5/ 灰色 内：N5/ 灰色	良好	口縁部 約 20%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第3～7層出土
42	須恵器	杯身	口径：－ 器高：残 3.0 底径：－	外：N4/ 灰色 内：N4/ 灰色	良好	口縁部 約 15%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第13～14層相当
43	須恵器	杯身	口径：－ 器高：残 4.0 底径：－	外：N8/ 灰白色 内：N8/ 灰白色	良好	体部のみ 約 10%	径1～2mm の長石含む		第3トレンチ 第14層出土
44	瓦器	椀	口径：13.6 器高：残 2.5 底径：－	外：N3/ 暗灰色 内：N3/ 暗灰色	良好	口縁部 約 10%	精緻	樟葉型	第3トレンチ 第7層
45	黒色土 器	椀	口径：14.2 器高：残 1.9 底径：－	外：N3/ 暗灰色 内：N3/ 暗灰色	良好	口縁部のみ 約 10%	精緻		第3トレンチ 第8層
46	瓦器	椀	口径：14.0 器高：残 3.1 底径：－	外：N3/ 暗灰色 内：N3/ 暗灰色	良好	口縁部 約 10%	精緻	和泉型	第3トレンチ 第8層
47	白磁	椀	口径：17.6 器高：残 2.8 底径：－	外：2.5GY8/1 灰白色 内：2.5GY8/1 灰白色	良好	口縁部 約 10%	密		第3トレンチ 第9層

図 版



昭和 36 年撮影調査地周辺航空写真



調査地近景（東より）



第2トレンチ掘削作業風景（南より）



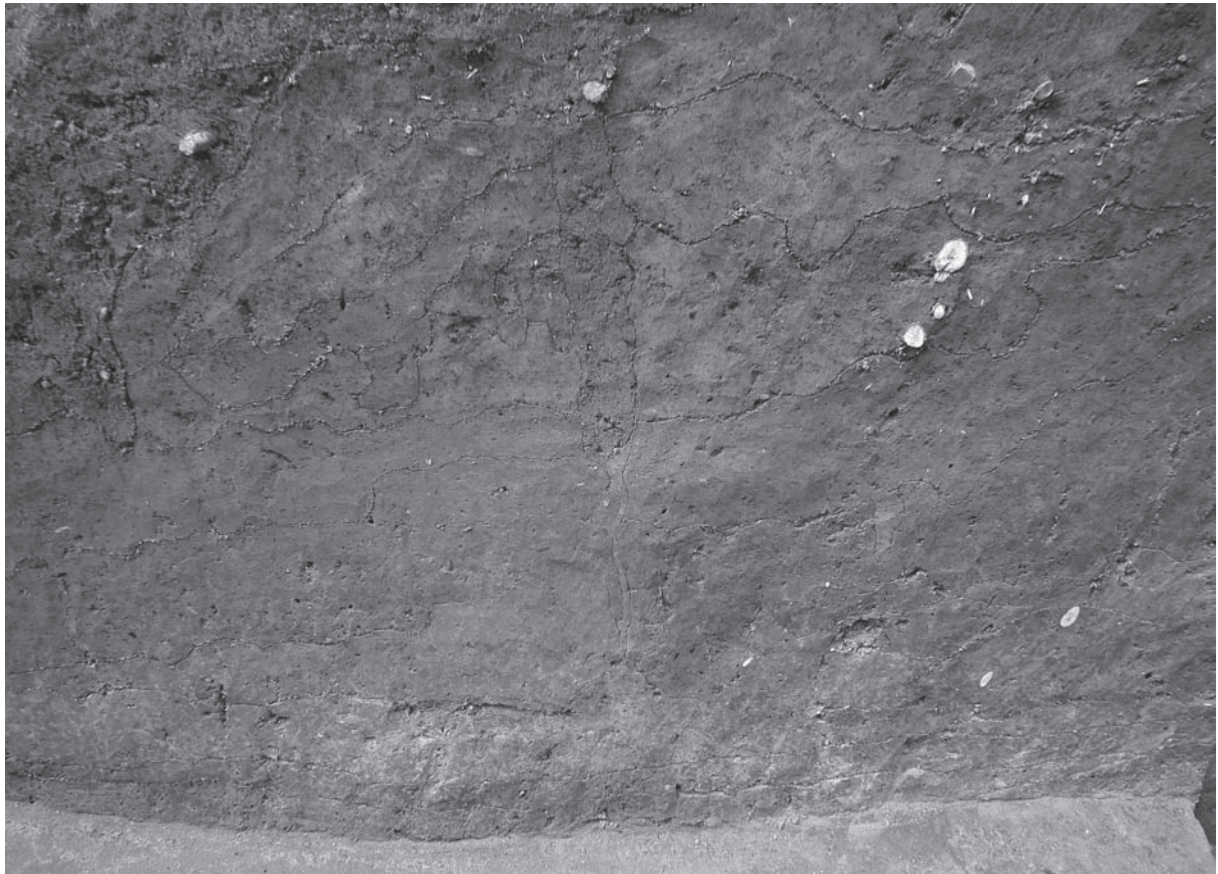
第1トレンチ西壁断面（北より）



第1トレンチ西壁断面（南より）



第2トレンチ東壁断面（南より）



第2トレンチ西壁断面噴砂痕跡（東より）



第2トレンチ西壁断面（南より）



第2トレンチ東側拡張部第7層上面検出状況（西より）



第2トレンチ東側拡張部遺構完掘状況（西より）



第3トレンチ東壁断面（拡張前 西より）



第3トレンチ東側拡張部第10層上面鋤溝検出状況（西より）



第3トレンチ東側拡張部大畦畔検出状況（西より）



第3トレンチ東側拡張部東壁断面（西より）



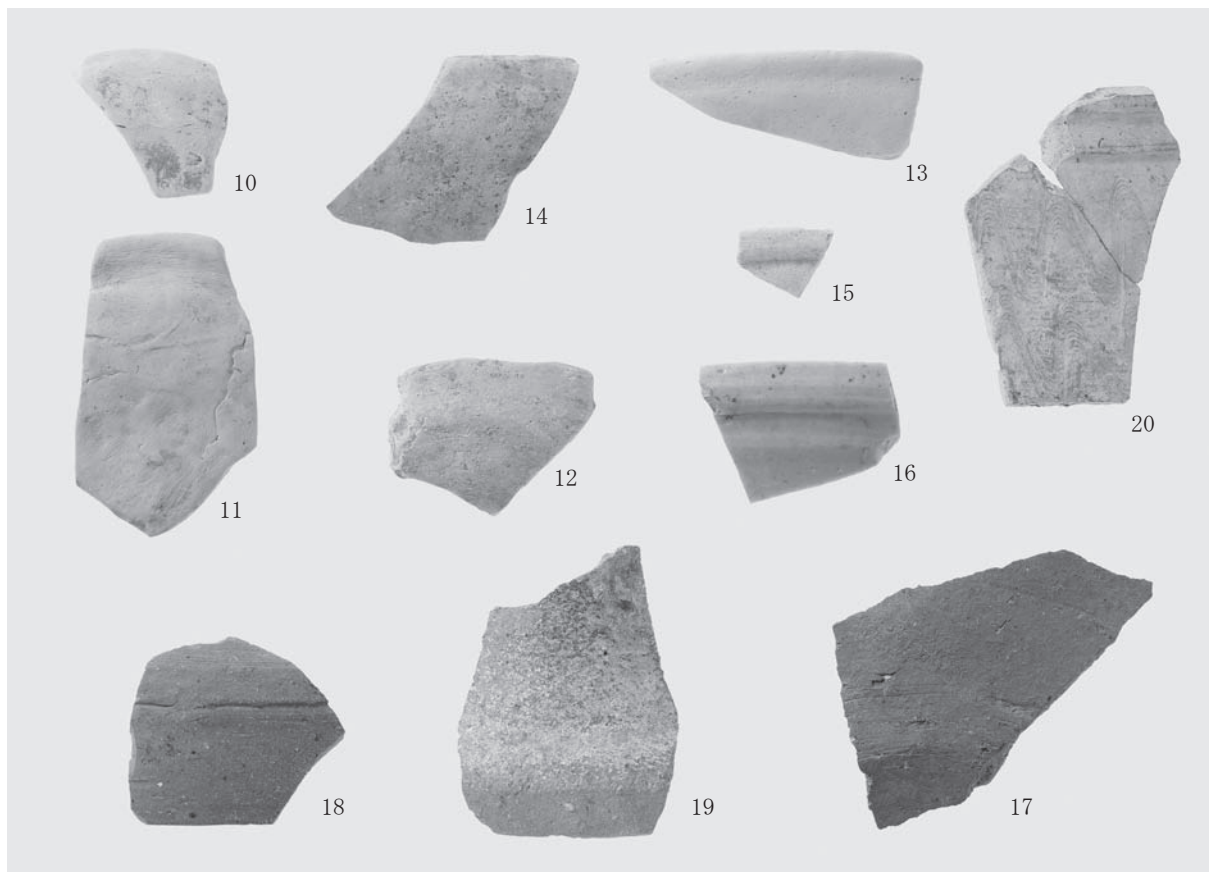
第3トレンチ西壁断面須恵器出土状況（東より）



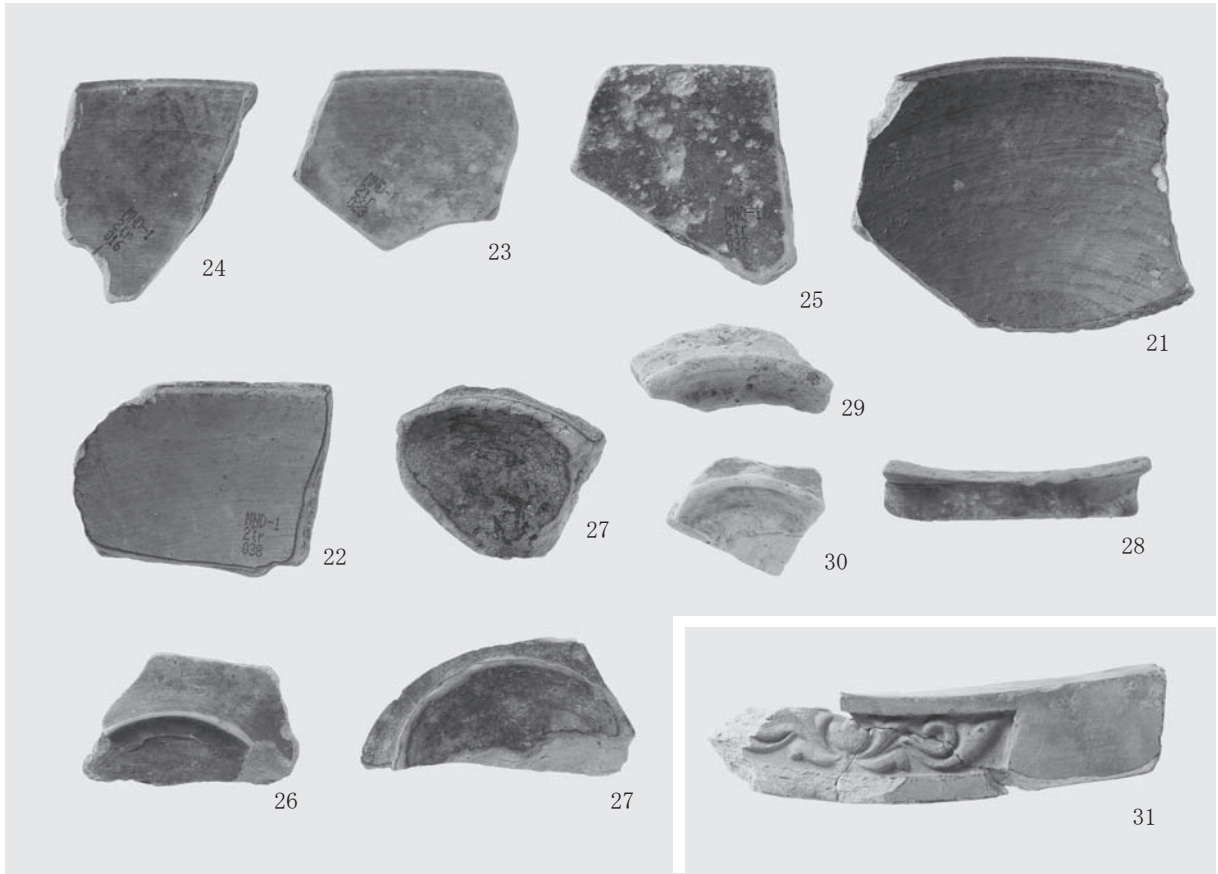
第2トレンチ調査終了状況（東より）



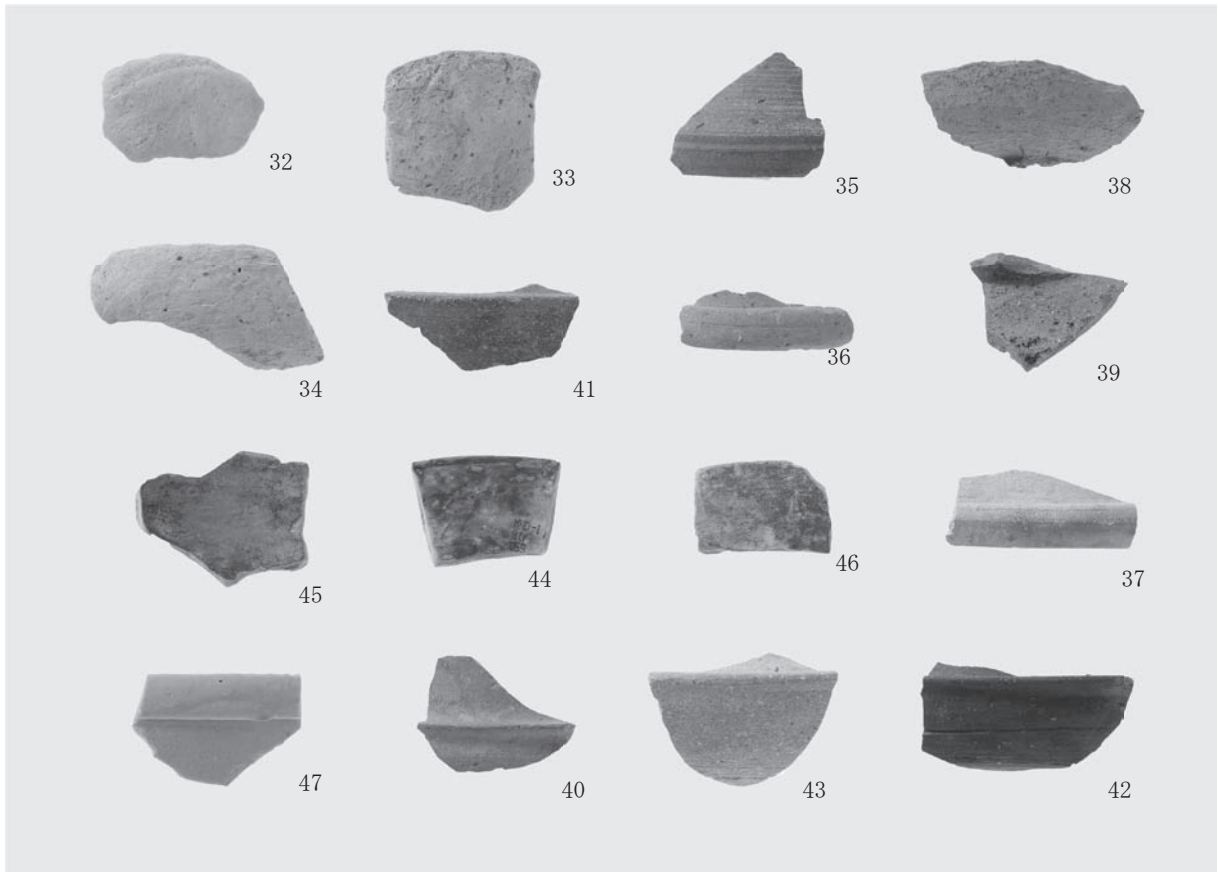
第1トレンチ出土遺物



第2トレンチ出土遺物



第2トレンチ出土遺物



第3トレンチ出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しせきでんまんだのつつみはくつちょうさほうこくしょ							
書名	史跡伝茨田堤発掘調査報告書							
副書名	歴史遺産整備事業に伴う発掘調査							
巻次	門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宇治原靖泰 影山美智与							
編集機関	門真市教育委員会							
所在地	〒571-8585 大阪府門真市中町1-1 TEL 06-6902-1231							
発行年月日	平成26(2014)年1月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
でんまんだのつつみ 伝茨田堤	おおさかふかどまし 大阪府門真市 みやのちょう 宮野町175- 23、183-3	27223		34度 74分 49秒	135度 60分 45秒	平成24年11月27 日～12月21日	31.85 m ²	遺跡整備
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
でんまんだのつつみ 伝茨田堤	堤防跡	鎌倉時代	堤・畦畔	瓦器、瓦質土器 土師器、須恵器 輸入陶磁器(白磁)				

史 跡 伝 茨 田 堤
発 掘 調 査 報 告 書

—歴史遺産整備事業に伴う発掘調査—

平成 26 年 1 月 23 日発行

編集・発行 門真市教育委員会

〒 571 - 8585 大阪府門真市中町 1 - 1

TEL. 06 - 6902 - 1231

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所

〒 578 - 0941 東大阪市岩田町 1 丁目 17 番 9 号

TEL. 072 - 968 - 7321
